

令和5年度産業厚生委員会行政視察報告書

【視察日】令和5年10月18日（水）～20日（金）

【視察場所】豊岡市、香美町（視察順）

- ① 豊岡アートアクション（中貝宗治氏：元豊岡市長、『なぜ豊岡は世界に注目されるのか』（集英社新書）著者）
- ② 豊岡市役所（福田嗣久議長、くらし創造部、観光文化部）
- ③ ^{きのさき}城崎国際アートセンター（志賀玲子館長）
- ④ コウノトリの郷公園（案内員）
- ⑤ ^{たじま}但馬漁協（村瀬晴好組合長）＊豊岡市内に支所があり、本所は隣の香美町にある。



【参加者】

鈴木孝委員長、岡崎大五副委員長、中村敦議長、長友くに、楠山俊介、浜岡孝、小林希美（随員）

【視察目的】

●「小さな世界都市-Local & Global City-」を20年前から標榜し、取り組んできた豊岡市は、「グローバル City」を目指す下田市にとって、先進事例であり、どのような取り組みが行われてきたのか、具体的な施策を学ぶ。

1) 「コウノトリも住めるまちづくり」を標榜することで、**循環型社会**をいかにして実現してきたのか？

2) **演劇を通じた町おこし**とは、どのようなものか？

3) 城崎温泉では、外国人観光客が、平成23年には1,118人だったのが、平成31年には63,648人と8年間で55倍超と急増している（令和5年度は1～6月で27,835人とコロナ禍から回復基調）。**インバウンド政策**はどのように行われてきたのか？

●**地域おこし協力隊**の多数採用（令和5年度地域おこし協力隊活動人数46名、全国5位）と、**集落支援員制度**の導入について、どのように採用し、運営されているのか？

●但馬漁協の独自商品開発等について

【視察先概要】

兵庫県豊岡市：人口74,551人（下田市19,110人）、面積697.55km²（下田市104.33km²）兵庫県で最も広い面積を持つ（平成17年に近隣6市町が合併）。

これによって、漁港や海水浴場、スキー場、温泉地、田園地帯を擁する多様な町に。冒険家植村直己の故郷（日高町）。

【視察報告】

① 中貝宗治氏レクチャー「小さな世界都市を創る - Local&Global の挑戦」

まちづくりの第一歩が、コウノトリの野生復帰にあった。

「コウノトリも住めるまちづくり」→環境都市「豊岡エコバレー」の創造

コウノトリも住める環境づくりには、農業に頼らない農業が不可欠。カエルも蛇も川魚も生息できる多様性、循環型の環境整備を行わなければ、コウノトリも住むことはできない。

かつては害鳥と呼ばれていたコウノトリ。

しかし実は「豊かな環境のシンボル」だった。

→農協と協力して、減薬、無農薬の「コウノトリ育む米」の生産。最大の消費地は沖縄および海外。高値で取引されることから（一般コシヒカリの2倍）、生産も拡大。子供たちの発案で学校給食にも導入されている。

→「豊岡環境経済戦略」（平成17年）の実施。「環境で飯が食えるか？」という反発も多かったが、農業から製造業、サービス業にいたるまで、80以上の事業で幅広く認定され、取り組みが広がっている。



<https://www.city.toyooka.lg.jp/kurashi/gomikankyo/1019253/1013507/1013497.html>

→「TOYOOKA」の取り組みが、「まるで地下水脈のように」（中貝氏）、希少絶滅危惧動物の保護、繁殖に取り組む世界各地の認知と評価に。→「コウノトリ育む米」の世界戦略にもつながっている。

コウノトリを柱に、町づくりが展開していく（小さな世界都市の戦略ストーリー）

「まちづくりには、ストーリーが必要だ」（中貝氏）

○大都市と資本力の差は歴然

→大きさや高さをはかってはいけない。

対抗軸は「深さ（蓄積）」と「広がり」

○グローバル化の進展で、世界は急速に同じ顔になっている

グローバル化の進展で、世界は急速に小さくなっている。

地域の自然、歴史、伝統、文化に深く根ざし、世界で輝く。

→地域固有なものが輝く（Local&Global）→世界がローカルを求めている

○世界に通用する「ローカル」を磨く。世界に通用するローカルを磨いて、

→人口減少を緩和する（定住人口）。

→それでも進む人口減少の衝撃を大交流でカバーする（交流人口）

→若年女性の不足で夫婦の絶対数が少ないことから、「ジェンダーギャップ」の解消

○城崎温泉にインバウンドを誘導する。

○演劇のまちづくり→創造の地こそが世界から人を惹きつける。



中貝氏と訪問議員

② 豊岡市役所くらし創造部（沖中正孝氏）

●地域おこし協力隊

「世界に通用するローカルを磨く」には、外からの多様な人材が必要である。移住を促進するエンジンとして、地域おこし協力隊の導入を強化しており、これまでに92名の協力隊員を受け入れ、各分野で年間50名の活動を標準目標に取り組んでいる。



豊岡市役所

1) 募集：各地域、団体等の要望を取りまとめ、年2回地域おこし協力隊の募集を行う。

2) 告知戦略：SMOUT(移住スカウトサービス：鎌倉発の「面白法人カヤック」が運営)を活用する。SMOUT 移住アワードで、豊岡市は全国第3位の人気移住先に（1位が長野県伊那市、2位が滋賀県長浜市）。<https://smout.jp/>

*SMOUTには熱海市、南伊豆町、西伊豆町も登録。

3) 担当者：沖中氏が中心となる4人のチームで、地域おこし協力隊の面接、採用、支援、相談、定着を手助けしている。

4) 管理：50名の隊員の業務管理は、「kintone」の管理アプリを独自開発し、年間約1,000万円の経費を削減、担当職員の負担も大幅に軽減している。費用は一人当たり8,000円/年なので、50名で40万円。<https://kintone.cybozu.co.jp/>

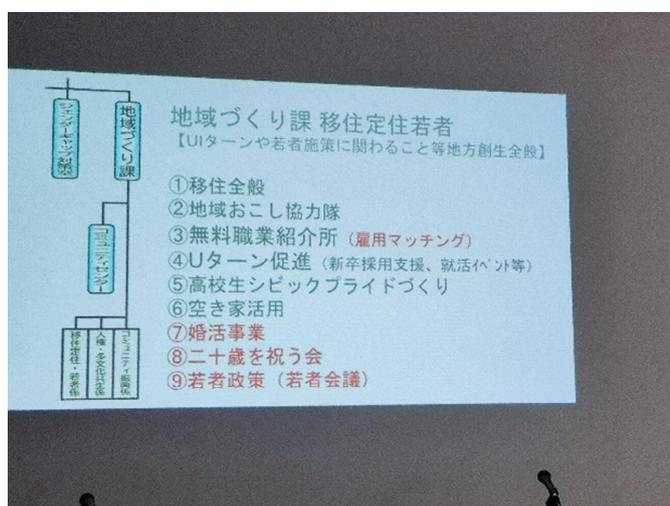
5) 補助事業：移住者のための空き家改修資金に総工費の三分の一、上限100万円までの補助を行ったおかげで、町中心部で若者層による新たな飲食店等が生まれている。

●集落支援員

人手不足の地域強化のために、29学区すべてに地域支援員制度を導入し、「地域マネージャー」として事務局の任に当たる。そこで吸い上げられた要望をもとに、地域おこし協力隊の募集につなげると同時に、任務期間を終了した地域おこし協力隊の受け皿としても活用している。雇用形態は、フルタイムもあれば、週末のみなど、まちまちである。

母体となるのは、「まちづくり協議会」で、行政区とは別の組織となっている。

●その他、公的婚活支援等、若者、女性の定着に向けて積極的な人口減対策を行っている。



② 豊岡市観光文化部（谷垣貴洋氏）

●城崎温泉におけるインバウンド戦略

1) 観光シンクタンク「一般社団法人豊岡観光イノベーション (TTI)」を豊岡市、全但バス、WILLER (長距離バス会社)、但馬銀行、但馬信用金庫が DMO (観光地域づくり法人) として設立 (平成 28 年)。観光戦略、データ収集、勉強会、ツアー等を実施する (外国人スタッフ 2 名)。



城崎温泉

泉

2) より正確なデータを収集することで、目標値を明確化する。データを解析し、HP で公表している。

<https://corp.toyooka-tourism.com/research/inbounddata/>

○データ収集方法

A. 城崎観光協会：各宿泊施設から、宿泊客情報を収集すると同時に、アンケートを実施。

B. NTTドコモモバイル空間統計を活用し、城崎を訪れた外国人統計を得る (200 万円/年)。

C. 観光案内所で、QRコードによる外国人アンケートを実施 (コーヒー一杯サービス)

3) 海外向け営業を実施 (1 か所あたり年間 100~200 万円)。

パリ、ニューヨーク、シドニー、台北に REP (販売店) を置き、現地語で情報発信を行う。主に現地旅行会社が SNS 等を駆使して、発信している。



「VISIT KINOSAKI」 <https://visitkinosaki.com/>

*従来、広告は広告代理店の担うところだったが、SNS の広告効果が大きくなり、発注額が廉価な場合は、広告代理店では受けられないので、海外広告は、旅行会社へ移行するケースが目立っている。しかし SNS 発信は、REP でなくても、日本からも発信が可能だから (言語は自動翻訳がある)、旅行業界では、REP による海外広告の費用対効果は高くないと見ており、積極的なビジネス展開は行っていない。SNS の性質上、独自に行ったほうが「熱が伝わりやすく」効果が大きいとの評価が一般的である (インバウンドを専門とする旅行会社代表談)。

豊岡の TTI では、京都のインバウンド戦略に倣い、導入した。

③ 城崎国際アートセンター (志賀玲子館長)

●城崎国際アートセンターの役割と、演劇によるまちづくりとは？

1) 平成 28 年に兵庫県営城崎大会議館が、地元の要望があり豊岡市に移管。主に 11 月からの松葉カニの季節に、宿泊施設として活用していたが、大小ある会議室の利用頻度は低く、舞台も狭く、講演会程度にしか利用できず、年間 2,000 万円の赤字を出し続けることに。

2) 平成 20 年近畿に現存する最古の芝居小屋『出石永楽館』(豊岡市出石) を改修復活さ

せると、人気歌舞伎俳優片岡愛之助を座長に、歌舞伎公演で町がにぎわぐ→成功体験

3) 城崎大会議館が、どのみち 2,000 万円の赤字なら、出石永楽館のように演劇に使うてもらうことで、城崎がにぎわうのではないか。中貝氏（当時の豊岡市長）がたまたま講演で豊岡市を訪れた劇作家の平田オリザ氏に相談し、劇場としては狭いので、「アーティスト・イン・レジデンス」として活用することに。舞台役者たちが、暮らしながら使える稽古場としてなら、会議室をスタジオに改装することでできるのではないか（発案は中貝氏）。

平成 26 年「城崎国際アートセンター」としてリニューアルオープン。平成 27 年より平田オリザ氏が芸術監督に着任。平田氏の移住を受けて、平田氏の劇団「青年団」も東京から拠点を豊岡市に移し（令和 2 年）、劇団員も少しずつ移住する。

城崎国際アートセンターでは、最短 3 日間から 3 カ月までの宿泊、稽古場の無料貸し出しを行う（実現性の高い演劇作品に限る。審査あり）。その間、役者や関係者たち（通称「アートさん」と呼ばれる）が城崎に滞在、新しい風を送り込んでいる。



城崎国際アートセンター

→大交流（交流人口の拡大。世界に通用する「ローカル」を磨く）。

令和 3 年度：応募 71 団体（24 か国）採択 13 団体（4 か国）

令和 4 年度：応募 63 団体（17 か国）採択 11 団体（6 か国）

* 「アーティスト・イン・レジデンス」とは、舞台芸術に止まらず、絵画、陶芸、小説、デザイン等あらゆるジャンルのアーティストが必要としている施設で、創作に必要なインスピレーションを得るために、ホテルではない、落ち着いた日常的環境が求められている。

4) 令和 2 年 9 月から『豊岡演劇祭』をスタート（文化庁による「スポーツ文化ツーリズムアワード（2021）」受賞）。令和 5 年の来場者数は 22,000 人（9/14~24 の 11 日間。前年比 1.2 倍）。

→観光閑散期の 9 月に実施することで、観光の通年化の一助に（芸術文化の観光への展開）。

→演劇を通じて「深さ（蓄積）」と「広がり」を持ったまちづくりが実現していく。

5) 演劇を通じて、学校教育の場でもワークショップ等を導入し、「コミュニケーション」を育てる力に。

→芸術文化の過疎的消費地から芸術文化の創造の地へ変貌

「芸術文化は、強い個性の中から生まれてくる。芸術文化は、多様性を受け入れる風土を育み、まちの寛容性を高める」（中貝氏）

6) 令和 3 年但馬地方初となる 4 年生大学、兵庫県立芸術文化観光専門職大学開校（初代学長：平田オリザ）。定員 80 名。令和 3 年倍率 7.6 倍。偏差値は、静岡大学教育学部と同クラス。

→大交流、若年層人口の流入増大

④ 兵庫県立コウノトリの郷公園

●コウノトリ：羽を広げると約 2.2 メートル、背の高さは 110 センチ。湿地で暮らし、魚、昆虫、蛇、蛙など生き物を食べる。中国東北地方や、ロシア・アムール川流域等で生息し、越冬のため日本や朝鮮半島中国大陸に渡るほか、留鳥も認められる。くちばしは黒く、ヨーロッパ、アフリカのコウノトリとは近似種にあたる。



●コウノトリの保護：山階鳥類研究所の要請もあり、昭和 33 年豊岡市で保護活動が開始。

●コウノトリの絶滅：昭和 46 年に日本での野生コウノトリは絶滅。

●コウノトリの復活：昭和 60 年に、ロシアから譲り受けたコウノトリの人工飼育を開始。子ども達がドジョウを集めて餌を確保するなど、活動が始まる。平成元年ふ化に成功。2羽が生育。平成 3 年減薬、無農薬農業の開始。翌年、コウノトリの野生復帰計画が開始。平成 11 年「兵庫県立コウノトリの郷公園」がオープン。平成 15 年飼育コウノトリを野生に放鳥。平成 19 年野生化したコウノトリが、初めてつがいに。令和 5 年の日本での野生確認数は 383 羽に。

子どものころから、多くの市民がコウノトリに関わることで、「コウノトリも住める」まちづくりの柱が太く育った。

⑤ 但馬漁協（村瀬晴好組合長）

●但馬漁協：組合員数 449 名、準組合員数 991 名（計 1,440 名）。水揚げ高 94 億円（伊豆漁協の 3 倍超の規模）。沖合底引き網漁業を中心に、松葉ガニ漁で全体の漁獲の半分強を占める。その他、ベニズワイガニ、ホタルイカ、アカエビ、マガレイ、ハタハタ、ノドグロ、シロイカ等。漁獲数量は 11,356 トン。ホタルイカの水揚げ量は全国 1 位（以上令和 3 年度）。

○日韓漁業暫定水域と接し、北朝鮮のミサイル実験もある中で、危険と隣り合わせの漁場では、日本の国境防衛の役割もあると言われている。

○漁業者の所得向上と、資源の有効活用を目的に、市場で値を付けない魚介類を新たな商売の柱にしようと、商品開発部門を創設、力を入れている。(担当は移住者)。そんな中、地元の醤油会社、地元高校生とのコラボ商品も生まれている。直売所(遊漁館、かに一番館、フィッシャーマンズビレッジ)の運営や、オンラインビジネスも展開する。



地元醤油会社と開発した味付け魚醤

<https://www.jftajima.com/shopping/>

○人手不足は深刻で、インドネシアからの研修生の他、空き家を使った移住政策にも取り組んでおり、豊岡市から地域おこし協力隊の受け入れも行っている。

【総括】

●「小さな世界都市-Local & Global City-」の取り組み

1) コウノトリが暮らすためには、自然との共生が必要で、そこから有機農法での稲作が広がり、「コウノトリ育む米」が生まれた。この米は学校給食にも取り入れられている。また自然との共生を目指すことで、「環境経済戦略」が生まれ、循環型社会が作られつつある。そしてコウノトリの国際性が、価値観を同じくする世界のまちとの連携に結び付いている。

2) 演劇の稽古場である「アーツ・イン・レジデンス」を無償貸与することで、若年層の流入、演劇による学校教育の導入で子どもたちのコミュニケーション力アップ、「豊岡演劇祭」の開催で観光閑散期の需要喚起を行っている。また演劇への取り組みが、兵庫県立芸術文化観専門職大学の開校へとつながるなど、有形無形の影響が広がっている。

3) 豊岡 TMO を観光シンクタンクと位置づけ、各種観光政策を行う中で、最新のモバイル統計を活用するなど、確かなデータに基づいたインバウンド戦略を充実させることで、外国人観光客数の増加へとつながっている。

●地域おこし協力隊、集落支援員

地域おこし協力隊を積極的に取り入れることで、若年層の移住だけでなく、各産業分野において、貴重な戦略となっている。また 29 学区のすべてに集落支援員を採用し、地域の人手不足を補っている(まちづくり協議会が母体)。

●但馬漁協の商品開発

資源の有効活用のために、市場で値段の付きにくい海産物を、新しくできた商品開発部で商品開発している。なお、部員はすべて他地域からの移住者で新規採用。

豊岡には、コウノトリを柱にした「まちづくりの哲学」が根付いていた。

すべてがコウノトリにつながっているのだ。コウノトリという太い柱から、施策が枝となり、葉をなしている。中には太い枝に成長している分野もあり、そこには顔の見える職員、関係者たちの工夫と努力、最新の制度やテクノロジーの導入があった。

下田にコウノトリはいない。

しかし、コウノトリに代わるものはきっとあるはずだ。

わたしたちは、わが町下田に、どんなストーリーを根付けられるのだろうか？

訪れたメンバーだけでなく、議員全員で、そして首長や行政職員、市民も巻き込みながら、考え、チャレンジし、一つずつ「グローバル CITY 下田」を実現していきたい。

(了)